

猛暑が続いております。熱中症は室内で起こすことも多いそうです。御互いに温度調節、水分補給に気を付けて参りましょう。

夕方私が仏前にお参りをしてちょうど終わる頃、5歳になる次男が横に来てちょこんと座り阿弥陀様の御掛軸の方を指さし言いました。「仏様はあそこにいるの？」私はその質問に対しある先生のお話を思いだし答えました。「そうだよ、あそこにいらっしゃるよ。そして、ここにもいらっしゃるんだよ」といって息子の頭に触れてみました。するとぼか～んとした表情になりました。別の部屋に行っていました。

さて、皆様だったらどうお答えになりますか？私がそのように答えた理由は先程申し上げたある勉強会での講師の先生のおはなしを思い出しての返答でありました。

そのお話とは、先生には3歳になるお孫さんがいらっしゃるそうです。そのお孫さんといっしょに本堂の阿弥陀様に向かい「さあ一緒になんまんだぶしようね」といって合掌させ上手にできたら「えらいね～」とい

ってすごく褒めてやるそうです。ここまで聞くとただ孫自慢ののろけ話のようでしたが、その後話が一転しました。「実はかわいさのあまりこういった接し方をずっと続けているとどうもよくないんです。」先生がおっしゃるには、「小さい時は大人に褒められるのがうれしくて仏様に合掌して念仏を申しますが、だんだんと大きくなるにつれ科学の知恵が付いてくると物事を科学的理屈で考えるようになります。そして小学生高学年ぐらいになりますと（あの仏様って人間が作ったお人形じゃないの）そして中学生ちょうど反抗期に入りますと大人に対する偏見も入り（大人はなんか幼稚なことをするなあ、あんまり賢くないなあ）などと思い完全に仏様から離れてしまいます。」そこで先生が教えて下さったことが「あの仏様にお参りをするんだよと固定した考えで常に押し付けて行くのは良くないのではないのかと思います」ということでありました。私は過去の自分のことも思い出しながらそのお話に「なるほど」と深く頷くところがあり、たまたま先日5歳に

なる次男が訊ねてきた質問に先程の返答をした次第でありました。

仏様の本質は、親鸞聖人のお言葉を引用いたしますと「いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり。」（『唯信鈔文意』）と示されるように私たちには知り得ることができませんが、そのようなわたしたちに対し仏様側から「法蔵」と御名のり下さり、すべての苦しむものを救いたいと願われ、「もう安心しなさい阿弥陀という仏に成ったから私にすべてをまかせなさい」と「南無」の二文字を付け「南無阿弥陀仏」という、いつでもどこでも称えられる仏様になりました。お寺の本堂にいらっしゃる阿弥陀様も、お仏壇の中の阿弥陀様もこの意味をあらわしております。いつでも、どこでも、だれにでも「もう安心しなさい、たのむから私を頼んでほしい、必ず浄土で仏にさせてみせるから」と呼び続けてくださっているお姿です。このお姿は仏様側からの慈悲のはたらきかけです。これを「他力本願」と申します。合掌